

報 告

終末期患者に寄り添うことを意識した看護学生の患者への関わりの特徴

Characteristics of interactions of nursing students who became aware of the importance of empathizing with terminally ill patients

横山ひろみ, 富田幸江, 千葉今日子

Hiromi Yokoyama, Sachie Tomita, Kyoko Chiba

キーワード：看護学生, 終末期患者, 寄り添う

Key words : nursing students, terminally ill patients, empathize with patients

要 旨

本研究は、終末期患者に寄り添うことを意識した看護学生の患者への関わりの特徴を明らかにすることである。

研究対象者は、関東圏内の看護基礎教育3年課程の終末期患者を受け持った看護学生153名を解析対象とし、郵送法による無記名自己記入式質問紙で調査をした。調査内容は、「個人属性」、「日常生活や看護学実習での人との関わり経験」、「コミュニケーションのとらえ方」、「共感性」、「終末期患者との援助関係形成への経験」、「学生が終末期患者に寄り添うことを意識したか」とした。

分析方法は、「学生が終末期患者に寄り添うことを意識したか」の有無を目的変数とした。説明変数と目的変数との有意差 ($p < 0.05$) をみるために、2変量解析を実施した。さらに、有意差 ($p < 0.05$) のみられた変数を説明変数として多重ロジスティック回帰分析 (変数増加法, 尤度比) を実施した ($p < 0.05$)。

その結果、学生が終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴は、患者とのコミュニケーションが深まったと感じていた (オッズ比 6.389 倍)、患者が必要としている援助を実施したいと思っていた (オッズ比 6.297 倍)、患者の不安を和らげる関わりができたと感じていた (オッズ比 5.247 倍)、他の実習で患者と関係を形成するときに困難感を感じていた (オッズ比 0.361 倍) であった。

I. はじめに

1975年以降、死を迎える場が自宅から医療施設へ移行し、病院で人生の最期を迎える人が8割を超える現状である (厚生労働省, 人口動態統計年報 2016)。病院で死を迎える人が多く、終末期にある患者は、痛みなどの身体的な苦痛を感じたり、疾患による症状の出現で今までできていた日常生活行動ができなくなったり、これまでの生活を大きく変えざるを得ない状況に陥ることも

多い。また、死がまじかにせまったことによる悲嘆や苦悩を感じ、精神的に不安定な状態に陥ることもある (梅川, 2015)。このことから、看護師は患者が最期のときを迎えるまでの限られた時間を患者がその人らしく生活できるよう、患者の望みを聴き必要な援助を提供することが求められ、看護師には、患者に寄り添う関わりが期待される (梅川, 2016)。しかし、苦悩や不安を抱いた患者を目の前にすると、看護師は患者への援助において、どのような意味を見出し関わっていけばよいのか対応

に迷う場面に直面するなど、終末期患者との対応に困難を感じている状況が報告されている（岡田ら，2012: 直成ら，2016）。

将来、看護師となる看護学生（以下、学生）においても、終末期患者が最期のときをその人らしく過ごすために寄り添うなどの関わりを身につけていくことが大切である。山手（2014）は、終末期実習で、学生が患者や家族と関わる際に、看護師に必要な態度として、患者や家族を理解し、受け止め、寄り添い、患者や家族の苦悩と一緒に向き合う姿勢が必要であることを指摘している。

しかし、学生は看護を学習している途中であり、核家族化の影響により学生が死に立ち会う経験が少ない状況である。このことをふまえると、学生が死を迎える患者と関わることは、看護師以上に困難を伴うことが推測される。先行研究においても、学生が、看護学臨地実習（以下、実習）で終末期患者を受け持ったとき、心理的な混乱や脅威に直面するなど、死を迎える患者にどのように向き合い、関わるのかという問題を生じることが報告されている（名越ら，2004: 星野ら，2004: 伊藤ら，2011: 重岡ら，2016）。これらの状況に対応するために、厚生労働省（2007）は、看護基礎教育のカリキュラム改正で、成人看護学の教育内容として、「終末期看護」を履修することを決定した。

このことから、学生が終末期看護を学ぶにあたって、実習前の学内学習において、知識や技術の習得に向け、

さまざまな教育的な工夫が試みられている（名越ら，2004: 磯本，2014: 種市ら，2016: 菅原ら，2016: 原ら，2016）。また、これらの国や教育のとりくみを評価するために、終末期実習における学生の学びについて、複数の報告がみられる（上田ら，2012: 山手，2014）。なかでも、山手（2014）は、終末期実習で学生が学んだ内容について、看護師に必要な態度として、患者を受け止め、寄り添う姿勢が必要であると報告している。しかし、終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴を明らかにした先行研究はみあたらなかった。

そこで、終末期患者に寄り添うことを意識した看護学生の患者への関わりの特徴を明らかにすることで、学生が終末期患者に寄り添い、関係を築き、援助を提供するための指導に活かせると考え、本研究に取り組んだ。

II. 研究目的

終末期患者に寄り添うことを意識した看護学生の患者への関わりの特徴を明らかにする。

III. 本研究の概念枠組み（図1）

本研究では、文献検討、看護基礎教育に関わっている教育者らのブレインストーミング、研究者の実習指導の経験などから、終末期患者に寄り添うことを意識した

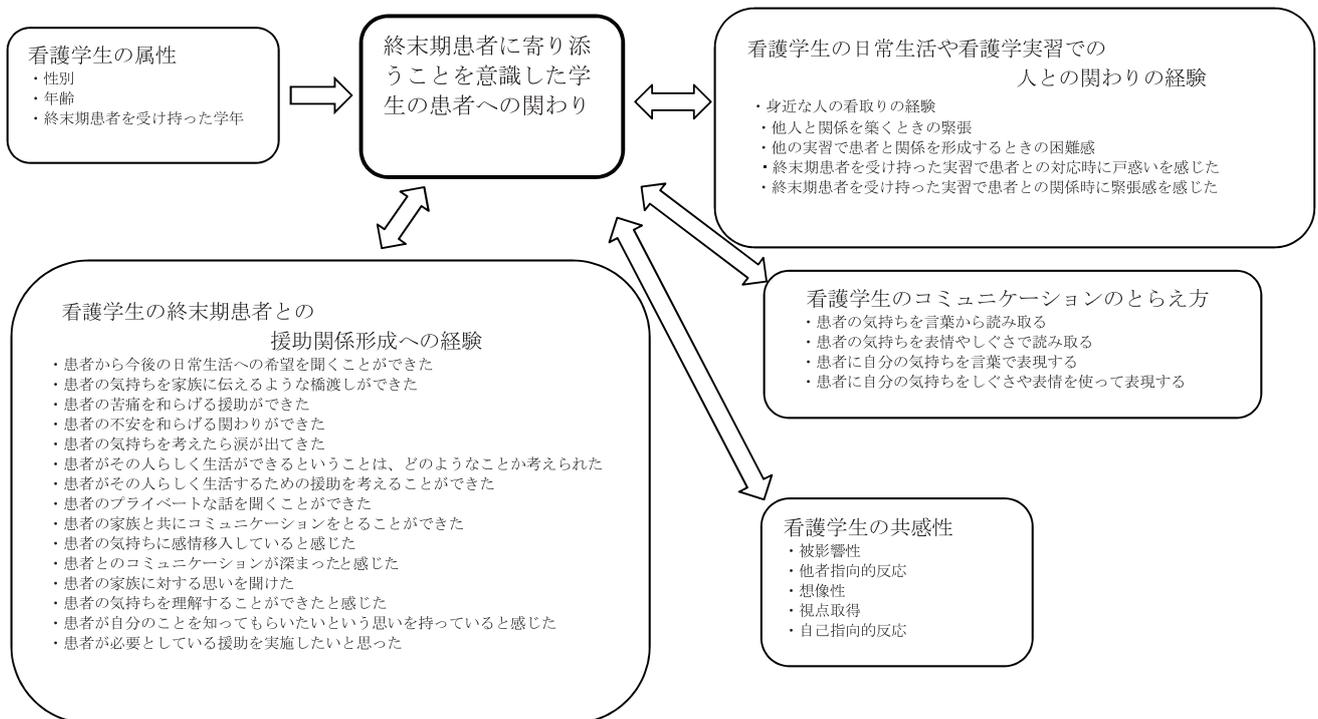


図1 本研究の概念枠組み

看護学生の患者への関わりの特徴を検討し、説明変数を選択した。さらに、これらの説明変数の類似内容を分類した結果、「看護学生の属性」、「看護学生の日常生活や看護学実習での人との関わり経験」、「看護学生のコミュニケーションのとりえ方」、「看護学生の共感性」、「看護学生の終末期患者との援助関係形成への経験」から概念枠組みを構成した。

IV. 用語の定義

1. 看護学生

看護基礎教育3年課程の看護専門学校で、成人看護学実習または老年看護学実習で、終末期患者を受け持った学生とする。

2. 寄り添う

学生が声かけをする際、患者の気持ちを受け止め、患者の立場に立った関わりをする際の学生の態度とする。

3. 終末期患者

終末期患者とは、がんに罹患し現代医療において治療効果が期待できない、または、慢性疾患の急性増悪を繰り返し、予後不良の状態にある患者とする。

V. 研究方法

1. 調査対象

関東圏内の看護基礎教育3年課程120校のうち、調査協力の得られた26校に在籍する3年次の学生で、今まで終末期患者を受け持った経験のあるものを対象とした。

2. 調査方法

1) データの収集方法

関東圏内の看護基礎教育3年課程120校から無作為に58校抽出した。学校長または、教務主任へ研究の目的や方法について記載した研究協力依頼書、研究承諾書、調査用紙を、返信用封筒とともに送付し研究協力を依頼した。依頼後、承諾が得られた26校に対し、研究対象者への研究協力依頼書、調査用紙、返信用封筒を郵送し、配付を依頼した。研究対象者からの回答は、自由意志に基づき、調査協りに同意の場合は、返信用封筒により個別に調査用紙を郵送にて回収した。

2) 調査内容

本研究は、自記式質問紙により以下の内容で構成した。

(1) 目的変数

学生が終末期患者への声かけに際して、患者の気持

ちに寄り添うことを意識したかについて、「全くあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

(2) 説明変数

① 学生の属性

年齢、性別、終末期患者を受け持った学年の3項目を調査した。

② 看護学生の日常生活や看護学実習での人との関わり経験

身近な人の看取りの経験の有無、他人と関係を築くときの緊張の有無、他の実習で患者と関係を形成する時の困難感の有無、終末期患者を受け持った実習での患者との対応時の戸惑いと緊張感の有無の5項目を作成した。

看取りの経験の有無、他人と関係を築くときの緊張の有無、他の実習で患者との関係形成時の困難感の有無について、「はい」、「いいえ」で回答を求めた。

終末期患者を受け持った実習において患者との対応時に戸惑いや緊張感を感じたかについて、「全く感じなかった」、「あまり感じなかった」、「やや感じた」、「とても感じた」の4件法で回答を求めた。

③ 看護学生のコミュニケーションのとりえ方

本研究の目的に合わせ、藤本ら(2007)のコミュニケーション・スキル尺度を参考に、「患者の気持ちを言葉から読み取る」、「患者の気持ちを表情やしぐさで読みとる」、「患者に自分の気持ちを言葉で表現する」、「患者に自分の気持ちをしぐさや表情を使って表現する」の4項目を質問項目とした。

質問への回答は「多くない」、「あまり多くない」、「やや多い」、「多い」の4件法で回答を求めた。なお、本研究にあたり、尺度から数個の変数を使用することの許可を開発者から得た。

④ 看護学生の共感性

多次元共感性尺度(鈴木ら, 2008)は、共感性を他者の心理状態を正確に理解する点に重きをおく認知的定義と、他者の心理状態に対する代理的な情動反応を強調する情緒的定義の両側面を統合した多次元的なアプローチから作成されたものである。尺度は、他者の感情や意見に影響をされやすい傾向を表す「被影響性」、他者に焦点づけられた情緒反応を示す「他者指向的反応」、自己を架空の人物に投影させる認知傾向を表す「想像性」、相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向を表す「視点取得」、他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応を示す「自己指向的反応」の5因子から構成され、クロンバック α 係数は順に0.78, 0.71, 0.70, 0.69, 0.60である。質問の回答は「全くあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の5件法で、下位

概念ごとに得点を算出した。本研究にあたり、尺度の使用の許可を開発者に得た。

⑤看護学生の終末期患者との援助関係形成への経験

実習で終末期患者を受け持った学生9名に、終末期患者と援助関係が築けたと思えた場面について、半構成的面接を実施した。面接内容を逐語録におこし、一意味一内容にコード化、カテゴリー化し、38項目を抽出した。これら、38項目の質問項目を基に、104名の学生に予備調査を実施した。

さらに、質問項目の精選は、通過率、天井効果、床効果により項目を確認した。また、質問内容の表面的妥当性に対する検討は、スーパーバイザーとして、看護基礎教育に携わっている大学の教員5名とがん看護の認定看護師1名、看護専門学校で成人看護学実習での終末期看護を担当している教員1名によって実施した。

これらの結果から、学生の終末期患者との援助関係形成の経験として抽出できた15項目を質問項目とした。質問項目への回答は「全くあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

なお、これら15項目については、1つずつの変数として回答を求めた。

3) データの分析方法

終末期患者を受け持った経験のある学生を解析対象とし、調査項目の記述統計を算出した。終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴を知るために、学生が終末期患者への声かけに際して、患者の気持ちに寄り添うことを意識したかについて、「とてもよくあてはまる」と回答したものを「寄り添うことを意識した」(以下、寄り添うことを意識した群)、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」と回答したものを「寄り添うことを意識しなかった」(以下、寄り添うことを意識しなかった群)とした。

学生が終末期患者に寄り添うことを意識した群と寄り添うことを意識しなかった群を目的変数に、各説明変数との有意差をみるために、2変量解析として χ^2 検定を実施した($p < 0.05$)。

多次元共感性尺度は、下位尺度ごとに得点を算出し、共感性の高い学生の特徴を、目的変数との関連をみるために、上位1/4を上位群、それ以外を下位群の2値に分けた。

年齢は、社会人経験があると考えられる23歳以上と社会人経験がないと考えられる23歳未満の2値に分けた。また、終末期患者を受け持った学年は、2年生と3年生に分け、2年生と3年生の両学年で終末期患者を受け持った学生は3年生に含めた。

それぞれの説明変数は以下のとおりに2値に分けた。

学生の日常生活や看護学実習において、終末期患者を受け持った実習での、患者との対応時の戸惑いや緊張感の有無については、「とても感じた」と回答したものを「感じた」とし、「やや感じた」、「あまり感じなかった」、「全く感じなかった」と回答したものを「感じなかった」の2値にした。学生のコミュニケーションのとらえ方については、「多い」と回答したものを「多い」とし、「やや多い」、「あまり多くない」、「多くない」を「少ない」の2値に分けた。学生の終末期患者との援助関係形成への経験については、援助関係形成への経験をよくしている学生の特徴を知るために、「とてもよくあてはまる」と回答したものを「あてはまる」とし、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」と回答したものを「あてはまらない」とした。

これらの結果から、終末期患者に寄り添うことを意識した学生の関わりの特徴をみるために、終末期患者に寄り添うことを意識したかの有無を目的変数とし、有意差($p < 0.05$)の認められた変数を説明変数として、多重ロジスティック回帰分析(変数増加法、尤度比)を実施した($p < 0.05$)。統計解析には、統計解析ソフトSPSS Ver22.0を使用した。

VI. 倫理的配慮

対象の看護専門学校の学校長または、教務主任には研究の主旨と研究対象者と同様の倫理的配慮を文章で説明し、許可を得た。研究対象者に対しても、研究の主旨を説明し、調査への参加は強制ではなく自由意志であること、調査用紙の提出をもって同意したものとすること、研究参加を断っても調査に伴う実習評価への影響や学業上の不利益を被ることは一切ないこと、調査用紙への記入は無記名とし、個人が特定されることがないこと、得られた情報は研究目的以外には使用せず、データの取り扱いには細心の注意を払うことを説明文書に示した。また、結果の公表に関しては、調査時の匿名性を保持し学会等で発表することも文章で説明した。

本研究は埼玉医科大学保健医療学部倫理委員会の承認を得た(承認番号M-36)。

なお、本研究に関して、申告すべき利益相反事項(IOC)は存在しない。

VII. 結果

研究の同意が得られた関東圏内の看護基礎教育3年課程26校に在籍する看護学生1092名に調査用紙を配布し、回収数は405名(回収率37.1%)であった。そのうち、終末期患者を受け持った経験のある学生は163名であった。目的変数に欠損のあったものを無効回答と

表1 学生が終末期患者に寄り添うことを意識した群、意識しない群と各説明変数との関係

N=153

		総数	寄り添うことを				
			意識した群		意識しなかった群		
		n	%	n	%		
患者の気持ちに寄り添うことを意識したか							
		153	42	37.3	111	72.5	
看護学生の属性							
年齢	23歳未満	91	31	34.1	60	65.9	
	23歳以上	60	10	16.7	50	83.3	*
性別	女性	145	39	26.9	106	73.1	
	男性	8	3	37.5	5	62.5	
終末期患者を受け持った学年	2年生	57	12	21.1	45	78.9	
	3年生	96	30	31.3	66	68.8	
看護学生の日常生活や看護学実習での人との関わりを経験							
身近な人の看取りの経験	あり	57	19	33.3	38	66.7	
	なし	95	23	24.2	72	75.8	
他人と関係を築くときの緊張	あり	107	25	23.4	82	76.6	
	なし	46	17	37.0	29	63.0	
他の実習で患者と関係を形成するときの困難感	あり	91	16	17.6	75	82.4	
	なし	62	26	41.9	36	58.1	**
終末期患者を受け持った実習で患者との対応時の戸惑いを感じた	感じた	58	14	24.1	44	75.9	
	感じなかった	95	28	29.5	67	70.5	
終末期患者を受け持った実習で患者との関係時の緊張感を感じた	感じた	33	5	15.2	28	84.8	
	感じなかった	120	37	30.8	83	69.2	
看護学生のコミュニケーションのとらえ方							
患者の気持ちを言葉から読み取る	多い	30	15	50.0	15	50.0	
	少ない	122	27	22.1	95	77.9	**
患者の気持ちを表情やしぐさで読み取る	多い	42	20	47.6	22	52.8	
	少ない	111	22	19.8	89	80.2	**
患者に自分の気持ちを言葉で表現する	多い	18	7	43.8	9	56.3	
	少ない	137	35	25.5	102	74.5	
患者に自分の気持ちをしぐさや表情を使って表現する	多い	18	10	55.6	8	44.4	**
	少ない	134	31	23.1	103	76.9	
看護学生の共感性							
被影響性	上位群	116	30	25.9	86	74.1	
	下位群	37	12	32.4	25	67.6	
他者指向的反応	上位群	111	24	21.6	87	78.4	
	下位群	42	18	42.9	24	57.1	**
想像性	上位群	118	29	24.6	89	75.4	
	下位群	36	13	37.1	22	62.9	
視点取得	上位群	109	23	21.1	86	78.9	
	下位群	44	19	43.2	25	56.8	**
自己指向的反応	上位群	117	29	24.8	88	75.2	
	下位群	36	13	36.1	23	63.9	
看護学生の終末期患者との援助関係形成への経験							
患者から今後の日常生活への希望を聞くことができた	あてはまる	25	10	40.0	15	60.0	
	あてはまらない	128	32	25.0	96	75.0	
患者の気持ちを家族に伝えるような橋渡しができた	あてはまる	11	5	45.5	6	54.5	
	あてはまらない	141	37	26.2	104	73.8	
患者の苦痛を和らげる援助ができた	あてはまる	28	17	60.7	11	39.3	***
	あてはまらない	123	24	19.5	99	80.5	
患者の不安を和らげる関わりができた	あてはまる	21	15	71.4	6	28.6	***
	あてはまらない	131	26	19.8	105	80.2	
患者の気持ちを考えたら涙が出てきた	あてはまる	61	21	34.4	40	65.6	
	あてはまらない	92	21	22.8	71	77.2	
患者がその人らしく生活ができるということは、どのようなことか考えられた	あてはまる	70	26	37.1	44	62.9	*
	あてはまらない	83	16	19.3	67	80.7	
患者がその人らしく生活するための援助を考えることができた	あてはまる	44	20	45.5	24	54.5	**
	あてはまらない	109	22	20.2	87	79.8	
患者のプライベートな話を聞くことができた	あてはまる	62	25	40.3	37	59.7	**
	あてはまらない	91	17	18.7	74	81.3	
患者の家族と共にコミュニケーションをとることができた	あてはまる	51	21	41.2	30	58.8	**
	あてはまらない	101	20	19.8	81	80.2	
患者の気持ちに感情移入していると感じた	あてはまる	40	16	40.0	24	60.0	*
	あてはまらない	113	26	23.0	87	77.0	
患者とのコミュニケーションが深まったと感じた	あてはまる	48	28	58.3	20	41.7	***
	あてはまらない	106	14	13.3	91	86.7	
患者の家族に対する思いを開けた	あてはまる	45	19	42.2	26	57.8	**
	あてはまらない	108	23	21.3	85	78.7	
患者の気持ちを理解することができたと感じた	あてはまる	25	18	72.0	7	28.0	***
	あてはまらない	127	24	18.9	103	81.1	
患者が自分のことを知ってもらいたいという思いを持っていると感じた	あてはまる	19	10	52.6	9	47.4	*
	あてはまらない	132	32	24.2	100	75.8	
患者が必要としている援助を実施したいと思った	あてはまる	110	39	35.5	71	64.5	***
	あてはまらない	43	3	7.0	40	93.0	

χ^2 検定 欠損値のある項目では合計数とはならない。

*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$ ***: $p < 0.001$

し、153名（有効回答率93.9%）を解析対象とした。

本研究の対象の特性は、年齢の平均は25.1歳±6.72で、23歳未満が91名（60.3%）、23歳以上が60名（39.7%）で、最小値20歳、最大値は45歳であった。性別は女性が145名（94.8%）、男性が8名（5.2%）であった。終末期患者を受け持った学年は、2年生が57名（37.3%）、3年生が96名（62.7%）であった。

1. 学生が終末期患者に寄り添うことを意識したかの有無

学生が終末期患者への声かけに際して、「患者の気持ちに寄り添うことを意識したか」の4件法の回答を寄り添うことを意識した群と寄り添うことを意識しなかった群に分けた。その結果、「寄り添うことを意識した群」は42名（37.3%）、「寄り添うことを意識しなかった群」は111名（72.5%）であった。

2. 2変量解析の結果（表1）

学生が終末期患者に寄り添うことを意識した群と意識しなかった群の目的変数と各説明変数との関係を表1に示した。

1) 学生の属性

学生の年齢において、寄り添うことを意識した関わりでは、23歳未満の学生（ $p < 0.05$ ）に有意差がみられた。

2) 学生の日常生活や看護学実習での人との関わりの特徴

学生の看護学実習での人との関わりについては、寄り添うことを意識した関わりと「他の実習で患者と関係を形成するときに困難感を感じた」（ $p < 0.01$ ）に有意

差がみられた。

3) 学生のコミュニケーションのとらえ方

学生のコミュニケーションのとらえ方については、寄り添うことを意識した関わりと「患者の気持ちを言葉から読み取る」（ $p < 0.01$ ）、「患者の気持ちを表情やしぐさで読み取る」（ $p < 0.01$ ）、「患者に自分の気持ちをしぐさや表情を使って表現する」（ $p < 0.01$ ）に有意差がみられた。

4) 学生の共感性

学生の共感性と寄り添うことを意識した関わりについては、「他者指向的反応」（ $p < 0.01$ ）、「視点取得」（ $p < 0.01$ ）に有意差がみられた。

5) 学生の終末期患者との援助関係形成への経験

学生の終末期患者との援助関係形成への経験については、「患者の苦痛を和らげる援助ができた」（ $p < 0.001$ ）、「患者の不安を和らげる関わりができた」（ $p < 0.001$ ）、「患者がその人らしく生活ができるということは、どのようなことか考えられた」（ $p < 0.05$ ）、「患者がその人らしく生活するための援助を考えることができた」（ $p < 0.01$ ）、「患者のプライベートな話を聞くことができた」（ $p < 0.01$ ）、「患者の家族と共にコミュニケーションをとることができた」（ $p < 0.01$ ）、「患者の気持ちに感情移入していると感じた」（ $p < 0.05$ ）、「患者とのコミュニケーションが深まったと感じた」（ $p < 0.001$ ）、「患者の家族に対する思いを聞いた」（ $p < 0.01$ ）、「患者の気持ちを理解することができたと感じた」（ $p < 0.001$ ）、「患者が自分のことを知ってもらいたいという思いを持っていると感じた」（ $p < 0.05$ ）、「患者が必要

表2 多重ロジスティック回帰分析による終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴

		オッズ比	95%信頼区間		
			下限	上限	
患者とのコミュニケーションが深まったと感じた	深まらない	1.000			
	深まった	6.389	2.466	—	16.550 ***
患者が必要としている援助を実施したいと思った	思わない	1.000			
	思った	6.297	1.165	—	34.045 *
患者の不安を和らげる関わりができた	援助ができなかった	1.000			
	援助ができた	5.247	1.555	—	17.702 **
他の実習で患者と関係を形成するときに困難感を感じた	感じなかった	1.000			
	感じた	0.361	0.139	—	0.938 *

多重ロジスティック回帰分析(変数増加法:尤度比)

*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$ ***: $p < 0.001$

判別率 83.2%

としている援助を実施したいと思った」($p < 0.001$)に有意差がみられた。

3. 多重ロジスティック回帰分析の結果 (表 2)

看護学生の終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴を表 2 に示した。

看護学生の終末期患者に寄り添うことを意識した学生の特徴について、多重ロジスティック回帰分析を行った結果、「患者とのコミュニケーションが深まったと感じていた」学生は、コミュニケーションが深まったと感じてなかった学生より、6.389 倍 (95% 信頼区間:2.466-16.550)、患者に寄り添うことを意識していた。「患者が必要としている援助を実施したいと思っていた」学生は、援助を実施したいと思わなかった学生より、6.297 倍 (95% 信頼区間:1.165-34.045)、患者に寄り添うことを意識していた。「患者の不安を和らげる関わりができたと感じていた」学生は、関わりができたと感じていなかった学生より、5.247 倍 (95% 信頼区間:1.555-17.702)、患者に寄り添うことを意識していた。他の実習で患者と関係を形成するときに困難感を感じていた学生は、感じていなかった学生よりも、0.361 倍 (95% 信頼区間:0.139-0.938)、患者に寄り添うことを意識していた。判別率的中率は、83.2%であった。

VIII. 考察

本研究の対象者の特徴は、看護基礎教育 3 年課程の学生を対象としたため、ほぼ 20 歳前半の学生が多く、性別も女性が大半を占めていたが、性別による有意な差は認められなかった。また、終末期患者を受け持った時期は、2 年次よりも 3 年次のほうが多かった。

本研究で、多重ロジスティック回帰分析による、終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴は、患者とのコミュニケーションが深まったと感じていた、患者が必要としている援助を実施したいと思っていた、患者の不安を和らげる関わりができたと感じていた、他の実習で患者と関係を形成するときに困難感を感じていた学生は、終末期患者に寄り添うことを意識していた。

以下に、これらの特徴について考察する。

1. 患者とのコミュニケーションが深まったと感じていた

患者とのコミュニケーションが深まったと感じていた学生は、コミュニケーションが深まったと感じていなかった学生より、終末期患者に寄り添うことを意識していた。この結果は、先行研究と一致していた (渡邊, 2014; 山手, 2014; 青柳ら, 2007)。

渡邊 (2014) は、看護学生は終末期看護において、

終末期の患者にはコミュニケーションが必要であると認識していることを明らかにしている。山手 (2014) は、緩和ケア実習で、学生は患者の気持ちを理解するために、コミュニケーションをとり、患者のことを第一に考え、関わりながら患者との関係性を築いていたことを報告している。青柳ら (2007) は、終末期の患者がどのように望んでいるのか、どのように感じているのかということに対して、看護師が積極的にコミュニケーションを図ることは、最終的に患者が満足できる生き方への支援の一つであることを指摘している。

このことから、終末期看護では、患者が残された時間をその人らしく生活し、自己実現を実感できるように、患者の望みを聴くためのコミュニケーションは、患者にとって、必要な援助を提供する上で重要であり、それらのことを学生は、終末期患者への看護をとおして学んでいることが伺える。終末期患者とのコミュニケーションは、患者に寄り添い、気持ちを支え、患者との援助関係を構築する上でも重要である。このことから、状態の悪い終末期患者とのコミュニケーションを円滑に図り、援助的な関係が築けるよう、実習前の学内の学習において、教員は学生のコミュニケーション能力が高まるよう教授し、支援していくことが重要であるといえる。

2. 患者が必要としている援助を実施したいと思っていた

患者が必要としている援助を実施したいと思っていた学生は、感じていなかった学生よりも、患者に寄り添うことを意識していた。この結果は、先行研究とほぼ同様の結果であった (渡邊, 2014; 林, 2000; 田村ら, 2012)。

渡邊 (2014) は、終末期実習において学生は、「患者の苦痛をやわらげ、日常生活を支えていきたい」、「患者や家族に合わせて、満足してもらえるような援助をしたい」という思いをもっていることを報告している。林 (2000) は、他の人のありのままの姿を感じとって、自分のなかに「私は何かしなければならぬ」という感情がおこるときに、私たちは他者にケアしているのであると示唆している。このことから、学生が終末期患者に寄り添う関わりをすることで、患者が必要としている援助を実施したいという思いにつながったことが推察できる。また、田村ら (2012) は、学生が患者に寄り添い援助することなどのケアリング行動をとおして、患者の病気に対する不安な思いを理解しようとしており、そこから患者の個性性を考慮し必要なケアを行っていたことを明らかにしている。

以上のことから、学生が、患者が必要としている援助を実施するためにも、患者に寄り添える関わりが重要であり、そのためにも、患者の立場に立って心から関心を寄せ患者に関わることが、終末期患者の看護において、

どのような意味をもつのかを、教員は学生と一緒に考え、よりよい関わりができ、援助に結びつくよう支援していくことが大切である。

3. 患者の不安を和らげる関わりができたと感じていた

患者の不安を和らげる関わりができたと感じていた学生は、感じていなかった学生よりも、患者に寄り添うことを意識していた。この結果は、先行文献には見られず、本研究の特徴といえる。

先行研究がみあたらないため一概には比較できないが、石川ら（2015）は、看護師が苦痛の多い患者に関わるときは、患者や家族の抱えている苦痛や不安を共に感じる事が終末期の看護に求められると指摘している。本研究対象である学生も、終末期患者への関わりにおいて、患者の立場に立ち患者に心からの関心を持ち寄り添うことで、患者の不安やその辛さを感じとり、そのことから、少しでも患者の不安を和らげる関わりができたと感じたことが推測できる。

4. 他の実習で患者と関係を形成するときに困難感を感じていた

終末期患者を受け持った以外での実習で、患者との関係を形成するときに困難感を感じていた学生は、感じていなかった学生よりも、患者に寄り添うことを意識していた。この結果は、先行研究にはみられず、本研究の特徴であるといえる。先行研究がみあたらなかったため、一概にはいえないが、看護実践に不可欠な援助の人間関係形成能力は、対象者である患者と相対し、緊張しながら学生自ら看護行為を行うという過程で育まれていくものとする。文部科学省の看護学教育の在り方に関する検討会報告（2002）では、実習の場で学生は、看護することの喜びや難しさとともに、自己の新たな発見をしつつ、学生ができること、できないことを深く自覚し、看護の学習を深め、成長していくことを報告している。また、実習で学生が患者と関係を形成するときに困難感を感じたとしても、教員や実習指導者が継続的に肯定的な支援をすることにより、困難を克服できたというプロセスも報告されている（西田ら、2005）。

このように、他の実習で患者との関係形成に困難を感じたとしても、教員の言葉や継続的な肯定的支援があれば、学生自身でその困難感を克服し、患者との関係形成に生かしていけると考える。また、終末期患者を初めて受け持つ学生は、患者に全人的に生じている苦痛を理解できないことの不安や、患者の病気に対する戸惑いに、どのように関わればよいか患者への関わり方に強い不安の傾向を示すことが多いと報告されている（伊藤ら、2011；完山、2005）。しかし、本研究対象者は3年生が多かったことから、それらを振り返り、実習での学びの

積み重ねや経験を終末期患者のとの関わりに活かすことで、寄り添うことを意識し、患者との関係性を形成しようとする努力に至ったと推測される。

IX. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、実習で終末期患者に寄り添うことを意識した学生の患者への関わりの特徴を、学生本人と患者との関係の築き方に関する受け止めなどの意識について、量的にリッカート法による回答から見たものであるため、寄り添うという内容まで明らかにするのは、量的研究では限界がある。

分析対象者数が少なく一般化に至るためには、今後、質的な視点からも研究を積み重ねていくことが必要であると考える。

X. 結論

終末期患者に寄り添うことを意識した看護学生の患者への関わりの特徴は、以下のとおりであった。

1. 患者が必要としている援助を実施したいと思っていた学生は、思わなかった学生より、患者に寄り添うことを意識していた。
2. 患者とのコミュニケーションが深まったと感じていた学生は、感じていない学生よりも、患者に寄り添うことを意識していた。
3. 患者の不安を和らげる関わりができたと感じていた学生は、感じていなかった学生よりも、患者に寄り添うことを意識していた。
4. 終末期患者を受け持った以外での実習で、患者との関係を形成するときに困難感を感じていた学生は、感じていなかった学生より、患者に寄り添うことを意識していた。

本研究をとおして、明らかになったことは、患者に寄り添うことを意識した学生は、患者とのコミュニケーションを深め、患者の気持ちを理解し、患者の望む援助を実施したいと思うと共に、不安を和らげる関わりを実施したと感じていた。また、終末期患者を受け持った実習以外で患者と関係を形成するときに困難感を感じたことが、終末期患者に寄り添うことを意識し関わることでできていた。

今後、看護教育において、学生が終末期患者との関係性を築けるように、コミュニケーションの基本的態度を身につけられるよう、教員は関わる事が大切であると考える。

謝 辞

本研究に実施するにあたり、ご協力いただきました看護専門学校の学校長、教務主任、教員の皆様ならびに学生の皆様に心より感謝いたします。

なお、本研究は、筆頭者の埼玉医科大学大学院における修士学位論文を加筆・修正したものである。

文 献

- 青柳道子, 溝部佳代 (2007) : 終末期における看護師の患者および家族とのコミュニケーションに関する文献検討, 看護総合科学研究会誌, **10** (1), 81-94.
- 藤本学, 大坊郁夫 (2007) : コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み, パーソナリティ研究, **15** (3), 347-361.
- 原元子, 上野栄一 (2016) : 成人看護学演習でエンゼルケア・エンゼルメイクを取り入れた学習の構造と特徴 - テキストマイニングの解析から -, ホスピスと在宅ケア, **24** (2), 84-91.
- 林泰成 (2000) : ケアする心を育む道德教育 - 伝統的な倫理学を超えて (第1版), 大北路書房, 京都.
- 星野礼子, 大森美津子, 古川文子 (2004) : 終末期患者を受け持った学生のストレス・コーピング, 香川県立保健医療大学紀要, **1**, 63-73.
- 石川美智, 山本真弓 (2015) : 身近な人との死別体験を教材とした死生観教育展開後の学生の思い, ホスピスケアと在宅ケア, **23** (3), 350-356.
- 磯本暁子 (2014) : 終末期患者紙上事例における看護学生のトータルペインへの理解, 新見公立大学紀要, **35**, 33-36.
- 伊藤まゆみ, 小玉正博, 大場良子 (2011) : 臨死患者のケア実習における看護学生の心的衝撃への対処プロセス, ヒューマン・ケア研究, **12** (1), 22-34.
- 完山妙香 (2005) : 看護学生の終末期看護実習における認知の分析, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録, **30**, 69-76.
- 厚生労働省 (2007) : 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, 2018.2.6.
- 厚生労働省 (2016) : 平成 28 (2016) 人口動態統計 (確定数) の状況 人口動態統計年報 主要統計表 (最新データ, 年次推移), <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/index.html>, 2017.9.20.

- 文部科学省 (2002) : 看護学教育の在り方に関する検討会報告書 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, <http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf>, 2018.2.6.
- 名越恵美, 細川つや子, 林由佳 (2004) : 終末期患者を看取る看護学生に対する教育介入, 看護・保健科学研究, **4** (1), 85-93.
- 直成洋子, 小幡明香, 原島利恵, 他 2 名 (2016) : がん看護に関わる看護師の困難感に関する研究 - 困難感の特徴と関連要因 -, 茨城キリスト教大学看護学部紀要, **8** (1), 19-27.
- 西田みゆき, 北島靖子 (2005) : 小児看護学実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処, 日本看護研究学会雑誌, **28** (2), 59-65.
- 岡田奈津子, 山元由美子, 佐藤みつ子 (2012) : 一般病棟看護師のターミナルケア実践におけるとまどいの変化, 了徳寺大学研究紀要, **6**, 85-94.
- 重岡秀子, 池本かつみ, 石崎文子, 他 1 名 (2016) : 成人看護学実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態, 健康科学と人間形成, **12** (1), 17-26.
- 菅原千恵子, 二瓶洋子 (2016) : グリーフケア活動に参加した看護学生の学び - 家族との死別経験や看取り経験をした遺族から -, 日本看護学会論文集 在宅看護, **46**, 115-118.
- 鈴木有美, 木野和代 (2008) : 多次元共感性尺度 (MES) の作成 - 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて -, 教育心理学研究, **56** (4), 487-497.
- 田村美子, 内山久美, 久木原博子, 他 3 名 (2012) : 臨地実習におけるケアリング教育 - 学生と患者との相互作用場面からの分析 -, 看護・保健科学研究誌, **12** (1), 56-63.
- 種市ひろみ, 熊倉みつ子, 森田圭子 (2016) : 在宅看取りを体験した介護者の講演聴講による看護学生への影響について - 死生観, ターミナルケアに対する態度に焦点をあてて -, 日本地域看護学会誌, **19** (2), 40-48.
- 上田稚代子, 上田伊津代, 畑野富美, 他 6 名 (2012) : 看護学生の緩和ケア病棟における実習での学び - 死生観・看護観のレポートからの分析 -, 関西医療大学紀要, **6**, 51-58.
- 梅川奈々 (2015) : 終末期看護をめぐる状況の変化と課題, 佛教大学大学院紀要 教育学研究科篇, **43**, 1-17.
- 梅川奈々 (2016) : 終末期看護の本質 - The essential nature of nursing care for the terminally ill -, 佛教大学教育学部学会紀要, **15**, 89-101.
- 渡邊千春 (2014) : 終末期実習に対する看護学生の構えに関する研究, 日本医学看護学教育学会誌, **23** (2), 21-26.
- 山手美和 (2014) : 緩和ケア実習における看護学生の学び - 死生観の変化と患者との関係性構築 -, 国立看護大学校研究紀要, **13** (1), 45-54.